

日蓮主義中興之英僧

常樂院日經上人

統一臨時號



統

一

# 日經上人の功勳

本多日生

本日はこの常樂寺の修繕改築の落成の祝を兼ねて、當寺の開祖日經上人の報恩法要を営むのであります。日經上人と元久成寺の開基日秀上人とは師弟であつて、日經上人の多くの御弟子の中の第一の高弟が日秀上人である、淺草の慶印寺は元小傳馬町に在つた常樂寺といふ寺を彼處に遷したつたので、常樂寺と申すは即ち常樂院日經上人の建てられた寺である、當時幕府の壓迫に依つて日經上人の御弟子の慶印といふ人の名を冠して慶印寺と云ふ寺號にしたのであります。要するに慶印寺は日經上人の開基、久成寺は日秀上人の開基で師弟の間柄である、さうして今度の合併は何の目的に依つて爲されたかと言へば市區改正の結果、元の慶印寺の地城が變更することになつたのが動機でありますけれども、此機會に於て慶印寺の地所を處理して、其處から佛教傳道の資金を得ること、又合併に依つて相當完備したる寺院殿堂を得て、其れを佛教の用に供しやうと云ふ目的で、合併が實行せられたのである、さうして元の慶印寺の地所は益々有利な方法に依つて經營せらるゝことに相成りまして、少くとも一ヶ年に一萬圓以上の地料を永遠に收めるのである、今日既にさうであるから或は數年の後には年收二萬圓以上にもなる時代がある譯であります。一方には元の久成寺の本堂が車裡になり、慶印寺の本堂が此處の本堂になつて斯の如く美しく修繕された譯であります。此計畫は最初に種々なる疑念を懐いた人もありましたのでせうけれども、確に立派な成功を告げて居るものであつて、其の一萬圓若しくは二萬圓の收入は毎年一箇寺或は二箇寺の寺を建立する所の力となつて、現に慶印寺がこちらに遷る間に、伊勢の四日市には其活動の餘力によつて新寺が建立せらるることになつて、今やドン／＼管轄に掛かつて居るので、本年中には新しい寺が一箇寺出来るのである、また慶印寺の地代は一文も請取つて居らぬのでありますけれども、早や既にさういふ風に新寺が建つて行くのである、私は今此の合併の結果からして、少くとも毎年一箇寺の新しい寺が出来るだけの力は確に得らるゝことと信じて居るのである、宗法を盛んにする所の政策に關してのことは、今日の來會者諸君に詳しくお話を申しても、餘り感興が無いかと思ひますこと故に、日

經上人の御事績に關して其功績の偉大な點を申述べて諸君の信仰を刺戟致したいと存するのである。

日經上人の一代の功績は頗る明白であり、少しく眼を日蓮門下の歴史に放つたならば、真に現れて來ることとして、日蓮上人以後一番大きな出來事は日經上人の事蹟である、それは只日蓮宗といふ一の宗旨に於ての出來事ではなくして實は大日本帝國建國以來今日に至るまでの政治と宗教の關係に於ての一番大きな出來事であるといふことは、大日本史料編纂官の中に於ての定論であるやうである、非常な大切な出來事が日經上人に依つて現れて居る、それは政治上の不法なる壓迫によつて正しき宗教を絶滅しやうとしたこととして、政治上の大失態であります。宗教が悪い事をして居る場合とか、迷信を弘める場合には政治が之に干渉するといふことは是は止むないことでありませうけれども何等其處に咎立をすべきことの無い正しい教を弘める場合に、それが弘まれば自分の悪い事が明になつて來る、そこで己の缺點を蔽はんが爲に、正しき宗教の宣傳を壓迫し妨害するといふ不法罪惡、それを我國の政治家が犯して居る時に、一方正義の傳道の華かなる活動をしたのが、此日經上人であります。我國の政教史即ち政治と宗教の關係に就てのことを調べる人は必ずや、日經上人の偉大なる事蹟に感激するであらうと思ひます、種々功績がありますが、時間に限がありませんから、其中の四つ五つの事を拾ひ上げて此一席の講話を終ることに致しますが、それだけで日經上人の御事蹟なり功勳の總てが盡きる譯ではありません、其ことは豫め御承知を願ひます。

先づ何人にも能く分るのは日經上人が御寺を建てられたことである、それは一人して五十三箇寺を建てられて居る、我が宗には日泰上人といふ方が日經上人より前に上總國に凡そ五百箇寺の寺院を建立せられて居るけれども、是は領主の力により他の宗旨のお寺を改宗したので、無論偉大な功績ではあるけれども、其勞力に於ては大して骨が折れない、お殿様が感心して其領内の寺は何宗に拘らず法華宗になつてしまはなければならぬと云ふ命令を發して、さうして一擧にして數百の寺院が日蓮聖人の教に歸伏したのであるからして、形は大きく現れて居るけれども、其骨折は比較的に少ない譯であります。日經上人の五十三箇寺は所も皆懸け離れて居るのである、さうして何等官憲の援護を受ける譯でもなければ、特別な援のある譯でもない、皆一々熱心なる日經上人の教化の下に感激したる信者が集つて、さうしてどうしても教の爲に會合する場所がなければならぬ、又教を弘める會堂が無ければならぬといふので、相集つて寺を拵へて行つたのである、それが五十三箇寺、所の懸け離れた所に建てられて居る、のみならず其寺院が何れも相當なる寺である、此常樂寺も非常な立派な寺であつた、小傳馬町に於て非常な勢力の有つた寺であつたのを、之を徳川が壓迫してさうして淺草の田圃の中に追ふたのである、寺を澤山御建てになつたことも畢竟日經上人の功績の一つとして記憶すべきことである。同時に日經上人は寺に關する功德の事を能く御説きになつて居る、今日は幸ひ寺院を改築したのでお寺が有難いといふことの意味を日經上人の書かれた物によつて申上げて見たいと思ふ。加賀の金澤に本覺寺といふ寺が今も現存して居りますが、其本覺寺の出來上つた時のことである、此の寺は加賀の家老の三輪志摩守と云ふのが日經上人に歸依をして建てたのであります。丁度日經上人が若州小濱から金澤の方に御出てになる途中に志摩守が駕籠に乗つて旅行して居つた、それを途すがら駕籠の中から見た所鼻の無い耳の無い坊さんが旅をして居る、不思議な坊さんだと思つて駕籠の中から話をした、「どうして貴公は鼻も無ければ耳も無いか」といふ問を發した時に、私は法難の爲に斯様なことに相成りました、斯々の譯であるといふことを述べられた、所が志摩守は元から日蓮聖人の教を信じて居つた人であるから非常に感激しまして、さういふ貴僧は貴いお方であつたかといふので、共に共に金澤に参りまして元の自分の檀那寺に日經上人を置いた、住職の在る所に置いたので居候のやうな譯であるが、併し珍客として日經上人を

置いたのである、所が日經上人は一日でもボンヤリして居ることは我が志に非ずといふので、夜となく  
 晝となく説教をせられたのである、さうして其れが熱心なる、精神籠めての説教であるから、日に／＼參詣  
 者が多くなりまして、遂には五千人数も其説教に參詣するやうになり、本堂に上れない人が本堂の縁の下で  
 ワイワイ騒いで居るといふやうなことに成つた。所が日經上人の教は正しいのであつて、同じ法華と言つ  
 ても所謂ドンドコ法華、雜炊法華、平法華といふやうな譯の分らぬ、唯だ太鼓を叩いてガヤ／＼言うて居る  
 やうなものを許さないのである、法華經を信する以上は法華經の教に背かぬやう、日蓮聖人を戴くならば日  
 蓮聖人の教に基くやうにしなければ、唯だ手前勝手譯の分らぬことをやつて居るは宜しくない、結構な教  
 に近づき得たのであるから、其教の意味合を能く心得て、正しき信仰をしなければならぬと、熱心に法を説  
 かるゝものだから、成程どうも其はさういふものであるかといふので、非常に感心をして今迄の過を悔ひ、  
 今までの間違を改めることになつて、不法の法華宗がやつて居ることの間違が段々明になつて來る、現に其  
 説教して居る寺にも間違がある、其處の和尚にも間違がある、聽いて居れば自分の小言を言はるゝやうな感  
 じもするのであるから、此調子でドン／＼やられたならば堪らぬといふので、日經上人の説教に妨害をする  
 やうな考を持ちました。そこで住職は志摩守に對して日經上人を私のお寺にお預して居ることはお斷を申し  
 たい、それはあの坊さんの説教が餘り固いことを言うて困りますから、お斷をしたいと思いますのである。志摩  
 守は其話を聽くや非常に激昂しまして、正しい教を傳へる日蓮宗でありながら、日經上人のやうに眞實を語  
 らるゝことに反對するやうな坊主は不都合である、貴様は即刻寺を出い、けれども斯様な汚れた寺に日經  
 上人を置くことは出来ぬから、乃公は新しい清淨なる寺を建てるといふので、別に新しく建てたのが今金澤  
 の六斗林に在る本覺寺といふお寺である、左様にして新しい寺が出来ました。其時の御祝の説教に日經上

人が言はれたことがある、其お話を目出度いから此常樂寺の普請落成の場合に申述べやうと思ふのであり  
 ます。

寺と云ふは支那の佛教が渡つた時に外國の事を扱ふ役所鴻盧寺と云ふのがあつた、今の外務省であります。  
 其處へ竺法蘭と云ふ坊さんが白い馬にお經を積んで來た、兎に角外國から初めてさういふ教を持つて來たの  
 であるから、所謂外務省たる鴻盧寺に其お經を置いたのであります。所が翻譯官なども其話を聽いて非常に  
 結構な印度文明の大切なる佛教が支那に渡つたといふことは、有難いことだと言つて歓迎しました、それか  
 ら其處に於て佛教の意味を役人共に話をするを許しました爲に、そこで佛教がドン／＼外務省の中から  
 弘まつたのであります。其時分の役所を寺と言つた、寺といふのは役所といふ名前である、院と云ふのは大  
 審院控訴院衆議院といふやうな譯で、院も役所といふことである、寺院といふのは役所である、然しそれは  
 支那に於て佛教が傳はつた時の關係であるが、印度に於ては之を迦藍と申して居ります。僧迦藍「さうざや  
 らん」とも言つて、即ち堂塔迦藍と言ひます、迦藍といふは梵語で、是は精舎と譯するのである「祇園精舎  
 の鐘の聲」といふあの精舎はそれである、精の字は白けるといふ字、舎は家といふ字で、お寺のことを「し  
 らげるいへ精舎」と書いてある、精けるといふことは米を搗き立て、糠を取つて白米にする所を精米所  
 といふが如きもので、お寺は人間の垢や精を取つて人間を白米に仕上げる所であるから、之を精舎といふの  
 であります。お寺に參詣をすれば人間の汚れた方が除かれて、清い美しい白米のやうな人間になる場所だと  
 云ふので、即ち之を精舎と譯して居るのであります。それは日經上人が書いて居らるゝことである。又迦藍  
 は功德林と譯する、功德の林であつて、柿や蜜柑林樹と云ふやうなものが澤山生つて居る所の林に行つて思  
 ふやうに良い果物を籠に入れて持つて歸るやうに、御寺は功德の林であり種々結構な功德善根を思ふが儘に

取入れて、自分のものにして歸る場所、お寺に行きさへすれば功德の木の實を多く得らるゝ所だといふので、功德の林と譯してあるのであります。又お寺は金剛道場と申します、金剛といふは如何なるものにも碎かれぬ、一番堅いものである、外の物は皆壊れる、人生の事は立派な金持だと言つても時には其財産を失ふこともあるし、立派な夫婦だと言つても一方缺けて行くものである、何物でも頼りにして是は間違無いと云ふものは世の中には殆どありません、人生の事總て有爲轉變ならざるものなしと申すのであります、石の上に腰掛けて居つたら轉ぶことはないと思ふけれども、地震が搖れば石其儘引くり返る、或國では大きな都が其まゝ、總ての人間總ての品物と同時に土の下に埋まつて居る所も世界には澤山ある。人生は總て頼る不確實なものである、確かなものは一つも無いのである、腐つた根太の上に踊を踊つて居ると同じ位なもので、バタリと抜けたら下に落ちやうなものである、誰が頼りだと言へば此子供が頼りだといふ、其子供がボンと流行感冒で死んでしまへば頼りの杖がボキリと折れてしまふ、誰が頼りだ彼が頼りだと言つた所が皆朽ち果て、ボキリ／＼と折れてしまふ、己れ自身の命も朽ち果てる、一切は有爲轉變である、皆盡さるものである、どんな大きな家を建て、置いても火事に遭へば焼けるし、焼けなくとも自分は其家から擔ぎ出されて火葬場に入るのである。所が此お寺は金剛道場と言つて、お寺に參詣して積んだ功德善根だけはどうしても壊すことは出来ない、其人が積んだ功德善根は火を以て焼くことも出来ず、水を以て洗し去ることも出来ず、又奪ひ去ることも出来ない、今日なら今日、諸君が參詣して功德善根をあなたの方の魂に植へ付けて參つたらば、何者が之を奪ひ去らうとしても奪ひ去ることは出来ない、其金剛道場に自分の魂を据えて置けば縱令天地が壊れても金剛道場の金剛座は壊れない、釋迦如來が成道を遂げ給ふた場所は菩提樹の下柔なる草を敷いて御坐りになつたけれども、功德が成就したる時は其場所は金剛の座であると仰せられた、此寺の疊は腐

らうとも、此本堂に於て諸君が積んだ功德のみは再び腐るといふことはないのである、それを金剛道場と云ふのである、左様な意味のことを段々御書きになつて、寺を綺麗にするも可し、建てるも宜いけれども、建て放しては疊も破れるし雨も漏るから、檀家と信者といふ者は其寺を大事にして能くそれを修繕し維持して行かなければならない、お寺は人が捨てて呉れて自分が參りして坐る所ぢやと思ふと、自分自身が皆相寄つて掃へる所のものがお寺である、是から後ともお寺を大切に爲に相當なる金銀を抛つて寺を造營修復するといふことを忘れてはいかぬ、他の坊さんならば錢金のことを言へば心が汚ないと思つて言ふまいけれども、此日經は命まで法華經に捧げて居るものである、如何に錢銀のことを言つても賤しい丁簡から言ふのではないと皆が考へて呉れるだらう、唯此の法をして益々盛ならしめ、從つて一同の功德を多く積ませたいと思ふからお寺が大切ぢやと言ふのである、生きて居る間は少しもお寺のお世話もしないで死んだら一番にお寺に擔ぎ込まれる、さうして永遠の住家が其お寺であるとすれば、達者な時分にお寺に心を注いで置かなければならぬぢやないかといふやうな苦いことが段々書いてある。又寺を建てることに就て京都の善立寺といふお寺を建てる時に書かれて居ることがあります。是は自分の兄として事へて居られる日善といふ方が一切經を調べる爲に經藏に這入つて居らるゝ時に、あなたが出て來ても他の法華宗は皆濁り果て、謗法の寺となり、穢れ果てたるお寺となつて居るから住まはるゝ所も無い譯である、就ては日經は自分の弟子竝に信者を督勵して一箇寺新しく寺を建てる、それは全く日經及び日經の弟子達の力て建てた所であるから、日經が建てた寺と言ふても宜いけれども、形の寺を建てるよりは高遠なる一切經の中に思を潜めて其研究をせらるゝあなたの方が餘程困難でもあり、功德も多い譯である、其一切經を御覽になつて抜書をした大切なるお經を經藏から出て日經に見ることを御許し下さつたならば、私は自分で建てた寺をあなたに差上げ

る、お寺と一切の經の抜書を交換する譯であるが、併ながら寺を建てる方は錢さへあれば何時でも建つ、一切の經の中に思を潜めて佛意の存する所を明にすると云ふは容易な事でありません、それ故に私の建てた寺にはありませんけれども、一切の經の抜書さへ見せて載くならば是はあなたの建てた寺にしたいといふので、日善上人の名を寺の名にして善立寺と名付けられた、面白いことと茲にも深い意味があるのであります。お寺の形ばかり建てた所が其中に教といふものが無くなつたら藤張り詰らぬといふので、教の方に力を盡して居る人が建てた寺にせられた。建てるには自分で金を出して居られる、日經上人はいきなり寄附帳に銀何十枚と書いて自ら寄附し、弟子にも寄附せよといふ信者にも寄附せよと言つて寄附をさして、そして建てた寺を日善上人の建立とせられた、そこに意味がある、錢だけ出して建てたのでは何でもない、教を弘めて、その感動感激の中に寺は建つて行くので、若し日本に日蓮聖人出でず、高僧が出てなかつたならば、日蓮主義に關する寺は一箇寺もあるべきものでない、どの寺も壇家が金を出して建てるのであるけれども、善き教を弘める人が無ければ一箇寺も建たない、錢を出したから檀家が建てたといふのは俗論である、其代り寺が破れて雨が漏るやうになつたならば、それは自然に破れて雨が漏るやうになつたのぢやけれども、其お寺の和尚がぬらくらだから雨が漏るといふことになるのである、そこを日經上人がハッキリと善立寺の建立に就て書かれて居ります。其尊い意味は味つても味つても盡さない程結構な教があるのであります。

左様にして寺を建てられたる功績も非常に大事なことである、寺ばかり建てても教も無ければ無論詰らぬけれども、教を弘めるには教を弘める場所が無ければならぬ、互に信者が寄つて法要を營み功徳を積む場所がなければならぬ、又お寺が在つても參詣もしない説教もしないやうならば建物は要らぬ、葬式の時だけ擔ぎ込むだけのことならば葬祭の場所は青山にもあり、築井にもありますから、其日だけ値切つて少しても安く借りたら其方が利益がある、お寺を捨て置くのは檀家が相寄つて法要を營み、功徳善根を積んで、先程申す通り功徳の林に入つて功徳の木の實を採り、金剛道場に座して如何なる場合にも地獄や餓鬼に落ちまいやうな睨りした坐り場所を作り、精舎に行つて糠を除いて白米の如き立派な人間になるぞといふ爲に、お寺には參詣するのであります。お寺は唯だお墓參りをする所ぢやと思ふのは東京の人だけの考で、箱根限つて西に行けば其んな馬鹿な考をして居る人は居らぬ。是は昔關東が野蠻であつた爲に宗教の感化を受けて居らぬから、お寺は御墓場ぢやと思ふやうな低級な考を有つて居るのである、お墓へ參るのは結構であるけれども、お墓へ參つて墓の上へ水を溶せたゞけては何にもならぬ、お經を讀むことも知らない、本當に題目を唱へることも知らないで、門から這入つてお墓へ行つてお墓の上に水を掛けて置く、そんな宗教といふものが何處にありませんか、是は皆教を聴かざる所の過が其處に現れて居るのである、自分の家の法事には來るけれども、お祖師様の御會式に參詣をしないと、其寺を建てた御開山の法要に主人が出ないで女房を寄越すと、いふやうなことは皆是は不心得なことである、一同に袴羽織を着けて來なければならぬ筈である、日經上人のやうな人が命がけて法を弘めて下さつたればこそ今日此お寺があるのである、今日ばかりでない、傳道の功徳善根を譲り受けて地獄に行くべきものが極樂に行き、餓鬼に生るべきものが佛に生れて來るのである、それ故に先づ第一お寺を大事にして、自分が始終來るならばお寺を綺麗にして心地好く其處で功徳の積めるやうにしなければならぬと思ふのであります。

又第二に數ふべき日經上人の功徳は、日蓮上人の教の筋を正しく宣傳せられた、所謂日蓮主義を發揮し宜明せられたる點に於て非常なる功績者であると思ふのであります、細かい理窟を研究して澤山の書物を読んだ學究的の坊さんは澤山あつたけれども、それは寧ろ日蓮主義の行方を履き違へて研究といふやうなことに

生涯を送るもので何の役にも立たぬ、元政上人が言つた六十卷の中に皓首すると申して、天台の三大部といふ書物が六十卷ある、其六十卷の中に頭の髪が眞白になつて腰が曲つてしまふ迄、其書物を調べる爲に一生を終つて何の働もせないといふやうなことは、假にそれが十分に分つたとした所が日蓮主義ではない、日蓮主義は活動の宗教であつて、日蓮聖人が草鞋を履いて鎌倉の巷に立つて傳道をせられた、日蓮の主義は法華經を口に讀むのではない、心に讀むのではない、更に進んで身に之を讀むと云ふ、實行を標榜したるものが日蓮主義である、日經上人は鮮かに日蓮主義の眞骨頭を得て一々其主義を實行に移して御出でになつた、身を以て日蓮主義を活躍せしめた點に於て眞に日蓮聖人の教義を發揮し宜明した人であります。のみならず上人が言論文章の上に主張せらるゝ所に於ても、教義の大切なる點が明に相成つて居ると思ひます。其の二を申しますれば日蓮門下が分裂しまして、種々の派に分れて詰らない議論に日を暮して外に向つて大に法華經の主義、日蓮の教を擴張宣傳することを忘れて居つたのである、今でも忘れて居る、内へ向つてコセ言うて小競合をするが爲に、此教を日本乃至一國浮提に向つて盛に弘めて行くといふ、雄大なる氣風を失ひ、コセ言うて居る、是が坊さんの頭に往き、其學癖と云ふもの、其教義上に於ける所の過といふものは、總ての問題を禪して居る、是が坊さんの頭に往き、信者の頭に往つて、少しばかり教義を學ぶ者は固陋頑冥語るに足らないやうな者が居る、實に慨嘆すべきことである、多くの日蓮主義に關する書物は其弊に非ざるものはない、又信者の口を開いて語る所も皆滔々として固陋頑冥の病に罹つて居ることは明である、診斷する迄もない、檀家と言つた所で、教義上に何か研究でもしたと見るならば、ハ、ア變な奴だなアと言ふことに相成つて居る、所が日經上人の行方は違ふ、實にキビシたる所の氣風を以て日蓮上人の教の大切なる所を押し、さうして戰ふ所は政治上の壓迫にも對抗し、他の反法華的の、總て法華經に反對する所の者達と戰つ

て、さうして今申す通り至る所に教線を張つて、一人して五十三箇寺を建てる程に未開墾の地に向つて法華の教を宣傳して行つた、其勢といふものは非常なものであります。さうして又教義上の事に就ても上行寺に於て書かれた書物に據りますと、日蓮聖人の教は宗旨の三大秘法と言つて本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目と云ふ三つが明になつたならば、後の事は彼れ是れ言ふ必要は無い位のものである、何も一致だとか勝劣だとか云ふことはない、何れも本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である、勝劣と云ふすら要らぬことである、況んや一致といふ如きは愚にもつかぬことであるといふことが書いてある、洵に卓論であります、さうして小さな學說よりは今や法華宗が滅ざれんとして居る時である、それにも拘らず何等の働もせないやうな者は、小さな教義學說がどうであつても身は誹法の輩、誹法の輩である、法が倒れんとし破られんとする時に何等の働をしないやうなる者は論ずるに足らぬ者であるといふことを言はれて居る。國で申したならば其國が滅びんとする時に詰らない議論をして居つて、敵が城下に押寄せて其國が危くなつて居るのに詰らぬことと争つて、味噌の煮方がどうかとか鹽が斯うだとか言ふて居るのは實に詰らぬことである、當時徳川の壓迫によつて日蓮聖人の教が全滅されんとする矢先に於て、詰らない事をゴテ言つて居る者は共に語るに足らぬといふことを言はれた、是は其當時に於て無論非常な大事な事であり、今日でもさうである、今日も滔々として世の中の思想が混亂悪化しつゝある、社會の狀勢一日も緩まずべからざる時に當つて詰らない所の事に引つ懸り、或は欠伸をして居るといふことでは何の顔を以つて日蓮聖人に相見えることが出来やう、又檀信徒の末に於てもさうである、先祖代々法華の血を受けたる所の者が、今日の場合に於て自ら眠を覺ますことが出来ないといふやうなことは、實に申譯が無いことであり、今や國民各自が思想の上に於て確固たる信念を打立て、迷はないやうにして置かなければ相濟まぬ時である、此際に當つ

てポンヤリして居る所の僧俗と云ふ者は全く國家で見たならば、國家が非常に大切なる場合、危機に瀕して尙且ポンヤリして居る人間と同じことである、それが日經上人に依つて非常に鮮かになつて居ります。

又日經上人が申置かれしことに、日蓮門下の僧俗の誓願、吾々の精神を注いで行く所は何處に集注されるかと云へば、唯だ一句の廣宣流布の大願に歸着するのである、諸君等は其事を御了解にならぬ方も段々あるだらうと思ひますが、唯だ自分が助かりたいとか、親を法事で助けたいとかいふことだけを知つて、此法華經の尊い教が世の中に弘まつて行くことに幾分でも手傳をするといふ護法の觀念を持たない者は、實は法華の信者でも檀家でもない、之を國家の上に就て考へても分る、無論自分の商賈、自分の幸福といふことはあるけれども、大日本帝國の榮えて行くといふことには何等の力も注がぬ、一錢の金も國家の爲に出すことなしに、唯だ己の幸福己の利益だけを思うて、愛國心が無いとしたならばそんな者は非國民と言はなければならぬ、日蓮聖人の教の中に於ても法華經の法なり教に一點の心を注がないて、唯だ之に依つて自分が幸福を得る、金を儲けるといふ要求ばかりして、眞に心から法の爲に捧げるといふ精神がなければ、法華の信者とは言はれない、縱令金を奉納しても此金を五圓上げなければ檀家として體裁が悪い、法事に行くのに二圓包まなければ體裁が悪いといふのではいけない、日蓮聖人が命を捨て、御弘めになつた日蓮主義の教が盛になりますやうにと云ふ誠心を籠めてやつて居るかどうか、それが無いとしたならば教に對しては無交渉なものである、それでは功徳が非常に少い、國家の爲にといふ誠心から貢獻すれば梅干一つを捧げても、草鞋一足捧げても價值があるが、之を出さなければ世間體が悪いといふのでは功徳にはならぬ、日本帝國の爲にといふことになれば一個の梅干を恤兵部に出しても非常に價值があるが、梅干一個を自分が食つても食はぬでも別に大したことでない。朝飯に梅干を食つたとて食はないからとて別に變はないけれども、其一個の梅干が

戦が始まつて、戰場に於て兵卒が食ふ物の無いといふ時に、梅干を集めて之を戰場に送れば、一つの梅干によつても非常な愛國の誠心を通る譯である、教を盛にしやう、教の爲にするといふ氣を失つたのでは法華氣質ではないのである、日本人氣質は愛國の精神である、法華氣質は教の爲に盡す一片の心無かるべからざるものである、是はあなた方の先祖が傳はつたもので、其血管に流れて居る血の流れを考へて御覽なさると法華氣質が滅びないならば何處かに法を思ふ精神が残つて居るに相違ない、あなた方のお婆さんお祖父さんがお寺を大事にせよとか信心して呉れと言つて、遺言されたといふやうなことがあつて、法が輝いて居るに相違ない、若しそれを言はない、親父が子供に法の爲にせよといふことを言はなかつたならば、其家庭は精神的には滅んで居る、唯だ檀家といふことが帳面に残つて居るだけである、此の意味を廣宣流布の一箇狀に書かれた文章が残つて居る、國が榮える中に一切の文明が開かれて行くと同じことで、教が傳はつて行く中に人が教はれ、一切の善根功徳が榮えて行くのである、教が滅びた時には一切、悉く消え去つてしまふのである、教が衰へたならば坊さんがあつてもお寺があつても何の功徳も其處に無い、又教が衰へたる時は人の心は段々と邪になり、苦みが殖えて人生の幸福といふものは無くなつてしまふのである、宗教の必要に眼を覺めざる人は教といふものゝ有難さが分らないのである、教によつてのみ人は眞實の幸福を得らるゝのであり、人間の心の奥に秘める苦みを除くものは唯だ教あるのみ、人間の罪惡に赴く心を矯め直して地獄に行く罪を食ひ止めてやるものは唯だ教あるのみである、日蓮聖人が盲目の者の盲いたる眼を開き、無間地獄に墮つる一切の人々に心の眼を開いて地獄に行くべき道を塞いでやつたといはれて居る、其有難い意味合は教によつてのみ得らるゝのである、それ故に廣宣流布の大願といふものがあつて國が盛になるのも正法を興隆することにあり、人が教はれるのも正法を弘めて行くことにありといふので、法華經は無論其意味になつ



て居ります。故に法華經の大切なる所には皆此の法華經を弘めて行くといふことが書いてある、日蓮聖人の御遺文にも其處は明白になつて居るのでありまして、丁度譬へて見れば火口に火を點ける時分には、角の好き燧石と良き燧金と乾ける火口と三つが寄りなければ宜い工合に火が取れないやうなもので燧石と燧金と火口といふものは、良き法と良き僧と良き檀那、良い所の教と良い坊さんと良い檀那即ち良い信者と、此の三つが寄合うて廣宣流布して大願を成就すべきなりとある、教が腐つてしまへば無論いかぬが、そこへ坊主が腐り檀家が腐つてしまへば、まるきり駄目である、其中一つが腐つてもいかぬ、火口がズク／＼になつてしまつて、石が圓くちびて居ては火が出ない、燧石がなまぐらであつてもいかぬが、燧石が良く燧金が良くて火口が濕つて居つては何にもならぬ、それを何處までも教を大切にして、良き坊さんを迎へて、各正しい信仰に入つて行くといふことにならなければならぬ。大體關東方面といふものは、お坊さんが何處から出来て來るといふことも考へて居らぬ、坊さんは溜溜から生えて來る蛆蟲のやうに思ふて居るけれども、お坊さんを拵へるには拵へるだけの教育もしなければならぬ、又お坊さんを迎かへるには檀家がそれだけの心掛を有つて居なければならぬ、大體東京といふものは粕つば坊主ばかり寄つて居つた所である、確な者は一つも居らぬ。私共の宗旨でも粕ばかり居つた、それを吾々が改革をして粕を追拂つて段々良い者と取換へたので、少し良い者が出來たのであるが、滔々たる東京の寺院は粕坊主ばかり居る、何故粕坊主で済むかといふと、檀家の頭が粕だから粕坊主で間に合ふ、誠にさういふことになつたならば自分の爲にも家庭の爲にも非常な損害である、お寺の坊さんが良い教を與へて呉れることによつて自分が段々導かれて行くのであるから、逆も銀行の中に千圓二千圓の株券が置いてあるといふ位な問題でない、自分の菩提寺の坊主が良い坊主であるか悪い坊主であるかといふことは非常な大きな關係がある、それが分らぬから關東の坊主は低い粕坊

主になつてしまつた、昔は一人の馬鳴菩薩を敵國が戰つて價金を取る時分に、三億圓の價金の代りに馬鳴菩薩一人を呉れと言つて連れて歸つた、名高い話である、馬鳴菩薩一人の方が三億萬圓の黄金よりも宜いと言つて連れて歸つたこともある、何も餘計金を出さなければならぬことはない、餘計金を出さなくても宜しいが、成るべく宜い坊さんといふことを考へなければならぬ、粕つば坊さんでも宜い、お寺へ參つた時に茶さへ汲んで貰へば宜いといふ考へて東京の人はやつて居るので、廣宣流布の願望といふものは薬にしたくも持つて居らぬと言つても宜い、日蓮聖人の流の末を汲む者であるならば、さういふことではいかぬ、萬燈を樹て、太鼓を叩いてドンドコ騒ぐだけでは何にもならぬ、萬燈には後五百歳中廣宣流布、一天四海皆歸妙法と書いてあるが、書いてあることを忘れてしまつて廣宣流布も何もあつたものぢやない、一貫三百どうでも宜いとか、云ふ様に譯が分らなくなつて居る、此項では御會式に子供が玩具にする萬燈にも狐の面を書くやうになつた、一天、四海、皆歸と三方に書く、四方しかないから一天四海皆歸妙法といふ妙法を取つて狐の面を書いて居る、一天四海、悉く狐の顔になる、一貫三百どうでも宜いといふ譯で、それは實に江民氣質を代表して居る、一天四海皆歸妙法の日蓮主義は棄たれて、一天四海皆狐に歸して一貫三百どうでも宜いといふことになつて居る、實に慨嘆すべきことではありませんか。日蓮聖人が命をかけて首の座に坐り雪の中に辛苦をなさつたのは何の爲であるか、一貫三百どうでも宜いのならば左様な艱難は嘗められないと思ふのであります、其の廣宣流布の願といふことを一つ日經上人に於て學ぶことが大事である、是は勝鬘經を御覽になると分りますが、勝鬘夫人が十の願を立て、それから其れを三つに縮めて更に一つの願に縮めた時に、唯だ佛法を守つて行くといふことが是が私の願であります、佛法を守り佛法を盛にしたならば、其日から菩薩の願望は、悉く皆な成就するものである、此一つの願に止を刺すといふことを述べた時に、釋迦如來

が善哉々々勝鬘と言つて御褒めになつたのであります、佛法を信ずる者に教を宣傳する觀念が無いからして基督教の爲に日本がしてやられるやうなことになるのである、基督教が萬里の波濤を冒してやつて来るに就ては皆後援する會が出来て居るのである、他國人てさへも己の教を弘めやうといふので下女なら下女が會を拵へて金を醸出して宜い人を他國へ出す資にする、下女の傳道會が出来て居る、或は女髮結なら女髮結が三錢五錢の金を集めて傳道しやうといふことで仕向けて居る、さういふ様に宜い人を日本に送つて来るのである、所が日本の帝都三百萬人の人口を有つて居る東京に於て佛法を宣傳するが爲にといふので會合してやるといふことに關して何等の力も無い、墨が破れましたからと云へば五十錢や七十錢は出すけれども、お寺に良い坊さんが居らぬから良い坊さんが慈しい、教を弘めるやうにしなければならぬと云つても何にも感じない、是れては結局日本がやられてしまふ、佛法が減びるのみならず、遂に日本がやられてしまふと云ふことを憂へるのである、そこで今日大に爲すべきことは廣宜流布の大願である、教の爲に盡すといふことになければならぬ、之を私は日經上人の第二の功績と考へるのであります。

それから第三の功績としては此教が政治上の壓迫によつて滅びんとした、其の大法難を拂はれた點であります、其の第一は信長の壓迫によつて法華宗の談義停止といふことの條約が出来て居つた、天文法難を受けて其後法華宗が京都に歸る和睦の條件の中に談義停止といふことがある、談義といふのは説教をしたり演説をしたりすることである、昔は下手の長談義と言つた、其の談義で、談義とは説教のことである、其説教を停止するといふことは日蓮聖人の言はれた生粹の意味に於て教を弘めることを差止めてある、説教すると云つても、骨抜説教といふことである、本當の所は言ひませんが、兎に角人は正しくあつたら宜しい、嘘を吐かぬが宜しいといふ所までは言ふけれども、法華經の信仰でなければ同じ佛敎と雖も駄目だといふやうなことは

言はぬ、日本の國は天子様の國であるから封建政治は間違つて居るといふやうなことは言はない、日蓮聖人が命をかけてやられた大切な所は骨抜にしてしまふといふことが談義停止の條約であつた、それ故其時からは説教や演説の數も少くなつてしまつて、よしやつても骨抜の演説しか出来なかつた、それを日經上人は年二十三の時宇都宮に行つて盛んに日蓮聖人の正義を傳道したのであります、所が他の宗旨の者がワイ／＼寄つて、さうして談義停止の一件を持出して、日經は不都合だといふことを所の寺社奉行に訴へて出たのである、所が其寺社奉行が却々考へて深かつた人と思へて、それはさういふことは信長との條約であつたにしても、今や織田家は滅びてしまつて居るのであるから、其效力が有效であるか無効であるか分らぬことである、效力を失つて居るかも知らぬ、仍つて是は京都の鷹司關白太政大臣へ伺を立て、此箇條が生きて居るといふことであるならばお前等の言ふ通りに日經に對してはあのやうな事を言はさぬやうに差止めるけれども、談義停止が最早效力が無いといふことであるならば教の爲に日經が日蓮聖人の教に基いてやるのは宜いぢやないかといふこと、其伺を京都の關白家へ立てると、關白家に於ては固より日蓮宗に同情があるから、そんなものは反古紙同様何にもならぬ、效力はない、遠慮は要らぬといふことである。そこで日經上人は其れ見たかといふことで、ドン／＼日蓮主義を説出した、此功績は當時に於て偉大なるのみならず、後世に向つて吾々が他の壓迫に對抗する時の決心として非常な宜いことを教へて呉れたものである。けれどもまだ日經上人の精神を知らない坊さん達は矢張り法華の説教と言つても骨抜説教ばかりやつたものが多かつた、それ故に割合結構な教を有つて居りながら、法華の信者の信仰及び意識が不透明になつたのであります、斯んなことになるべき宗旨ではありませんが、是は皆骨抜の餘程烈しい方法からして斯様な事に相成つてしまつたのであります。

次には慶長宗論の大事件である、是れは徳川家康が芝の増上寺の良如といふ坊さんと約束してあの事件を起した、家康が増上寺の坊さんに「何かお前の望があるならば聽いてやる」と言つた、昔の將軍とか殿様といふ者は能くそんなことを言つたもので、お前には世話になつたこともあるし、懇意にして居ることであるから、餘計は聽かれぬけれども一つなら何でも聽てやるといふことを面白ろ半分と言つた。昔安然和尚に其の様なことを言つた者があり、和尚は大津から京都に入る三日間の品物を代金に見積つてそれを貰ひたいと言つた、大津から京都へ毎日這入つて行く品物はどの位のものかといふことを三日間當つて見た所が、不幸にして安然は薄徳な人であつて、三日間大雨が降り降續いて、漸く藁を積んだ車が二臺しか入らなかつたといふことであるが、さういふ譯で家康が良如に向つて「お前何か願があるならば餘計は聽かれぬが一つ聽いてやらう」と言つた、所が良如は考へた、定めし田地でも呉れと言ふてあらうと家康は思つて居つたが、良如は考へ込んだ上「他の事に御願はありませんが唯一つ、それは日蓮の建てた所の四ヶ格言の法問である、日蓮宗では念佛無間禪天魔といふやうなことを言つて、此の淨土宗を叩き破つて來る、淨土宗を叩き破らうとして來ても外に怖いものは無いが、日蓮の建てた宗旨のみは怖ろしい、念佛無間には壞される虞がある、再びあゝ云ふことを言はぬやうにして貰ひたい、是ばかりが私の願であります」と言つて頼んだ、「そんなことは最と易いことである、承知した」と家康が輕はずみに受込んだ。將軍の權威を以つてやつたなら何でも出來ると思つたのであるが、不惜身命で鍛へて來た日蓮宗に打突つたから、却々そんな思つたやうな譯にいかぬ、そこに大問題が初つたのである。先づ京都の所司代の板倉の方に言つてやつた、さうして「念佛無間は經釋に御座なく、日蓮が誤に候」といふ謝罪證文を書いて所司代に差出せといふことになつた、所が京都の本山では誰一人左様なものに印形を捺す者が無い、非常なる壓迫を加へて來たから、其時に

本山の人達は日蓮聖人の御眞筆の大曼茶羅を取出してそれに血判をして誓約した。本山であるから間違なく日蓮聖人の御眞筆の大曼茶羅があります、其大曼茶羅の裏書に「如何なる壓迫があつても決して日蓮聖人の教に瑕を付け申すまじ」と云ふ誓約を書いて名前を記し、指を咬ひ切つて誓約したのである。日經上人は恰も當寺本山妙満寺の貫首であつて血判の一人であります。それ程固めて居るから幾ら言つてやつても口で言ふ壓迫位では動かぬ、板倉伊賀守から家康の所へ送つた文書は今尙殘つて居ります。然るに良如の方の催促が非常に烈しい、將軍に向つて「あなたは其んな事は何でも無い、易いことぢやと仰しやつたが、一向運びのつかぬのはどういふ譯でございますか」といふやうな調子で迫る、「それは抜からずやつて居るけれどもさう急には運ばぬものと見える、一寸待つた、今二月三月の間に運びをつけてやる」と言ふ、又催促する、「一寸待つた」「餘り待つたが長いぢやございませんか」言はれて「其れは實は斯ういふ譯ぢや」といふ、其譯といふのは却々えらい事で、板倉から將軍の處へ來て居る手紙に書いてある、「さうあなたに仰しやつても早速のことには參りません、段々八釜しく言つて行つたが、どのお寺へ行つて住職を呼出すと言つても住職の居る所は分らぬ、本堂の戸障子は外してしまひ、疊も揚げてしまつて、何時戰爭になつても差支ない準備が出来て居る、どのお寺に行つても其邊に人の子一人居るものでない、皆内から堅めて、何時でも籠城するといふ模様で、寺は城のやうな風になつて居る、戰の準備をして居る程であるから、所司代一人て申した位のことでは動くことではござらぬ」と云ふ手紙が來て居る。そこ迄は法華宗は皆よかつた、見上げたものであつた。所が狸登がなかなか賢いから、法華は一筋縄では動かぬと見ると、それでは何とかせねばならぬといふので參謀會議を開いて、其本山の中で一番意志の弱さうな、「精神の衰りして居ないやうなのを役所へ呼んで留置を食はした、何故に呼んだか分らぬやうにして、之を留置して、さうして「貴様之に印を押さな

ければ首が無いぞ」と言つて脅して、寒い處に打込んで火も遣らなければ飯も與へぬといふやうなことをして置く、斯ういふ酷いことをされたから精神の弱い坊主は遂に腰が折れて書きますといふことになつて「念佛無間は經釋に御座なく」といふことを書いて判を押す。其れを放して出すと色々なことを饒舌るから、それは別の所で美味い物を食はして叮嚀に取扱つて置く。其次に又精神の弱さうなのを物色して彼の坊主は油氣坊主だといふ偵察がつくと、又之を呼んで今申したやうな次第で印形を押させる、弱い奴から弱い奴からやつて行く、もう四つも五つも判が並ぶと、さう自分ばかり強いことを言つて居つてもいかぬといふのでザラ／＼と押ししてしまつた。それが愈々妙満寺の住職常樂院日經上人の所へ廻つて來た、所が日經上人をを見て非常に激怒された「皆大曼茶羅の裏書の誓詞に背いた糞坊主だ」と言つて其麻甲斐なきことを憤慨された。大聖人の御眞筆の裏書に、命に代へても決して聖人の教に瑕を付けまいといふ誓詞をして、血判して置きながら、之に背くといふ、斯様な者は人間とも何とも言ひ様がない、御祖師様の御眞筆の裏書の誓詞に背くやうな精神の腐れ果てた者は語るに足らぬ」と言はれて、非常に憤慨して居られます。是は荷も一山の管長たる者が日蓮聖人の御眞筆の裏書に誓詞をして血判したものに背くといふことは、當時の義に堅い人間から申して——今日と違つて武士道の盛なる世の中に御眞筆の曼茶羅に誓詞を書いたのを忘れるといふやうなことは、人非人とも犬猫とも言へぬ者である、其様な者がといふので日經上人は非常に之を罵つた、それで何と言つても日經上人は固く執つて應じないものであるから、遂に日經上人を擲め取つて、之を駿河の府中今の静岡に送つて種々甘言を以て説破らうとする、當時日本の大學校であつた足利學校といふ所から其校長をして居る所の學者で、寒松と云ふのが態々静岡に來て、さうして日經上人の宿に行つて旨いことを言つて上人を説いて居る「あなたの御志は誠に感心ぢや、けれども泣く子と地頭

には勝てぬといふことがあるから、兎に角家康が思ひ込んであゝ云ふことを言ひ出したのであるから、之に楯突くことは損なことである、茲は目を閉つて程宜く御やりになつたが宜からう、左も無いと法華宗一門の災となつて、遂に法華宗が滅ぼされるやうなことがあるかも知れない、宗旨滅亡といふことを以て感嚇した、それで日經上人は考へたのであります、之を強く言ふたならば「宗旨滅亡と云ふ壓迫が來るが、之を枉げて日蓮聖人の教に瑕を付けるか、どうしたものであらうか」と考へた、其時に日經上人は「如何なる壓迫が來やうとも迫害が來ようとも法には瑕を付けまい」と云ふ決心をして、斯ういふ返答をしたのであります「縱令駿河の辻に立て、生理にせられ、竹鋸を以て首を引斬らるゝとも左様なことは致さぬ」と言はれた、四辻の人が通る處へ以て行つて土を掘つて立てた儘に其處へ生理にして、首だけ土の上へ出して置いて、其處を通る人間に竹鋸を以て首を挽かすのである、用事があつて其處を通ると役人が控えて居つて「此處を通りたくば此坊主の首を竹鋸で一つ挽け、左もなければ通ること相成らぬ」と云ふ關所を造つて居る、用事のある人は通らねばならぬので仕方なく竹鋸を採つて一つ挽く、竹鋸で何も斬れるのぢやない、皮が唯だ引つ張られるだけであるが、それで幾度も幾度も挽くと段々皮が破れ血が流れて肉が崩れて行く、それを後から／＼と來る人來る人にやらせるのである、最も惨酷なる刑罰であります、其覺悟を日經上人が言うて居る「駿河の辻に生理にされて竹鋸を以て首を引斬らるゝことがあらうとも、日經は法華經に間違があるの、日蓮聖人に間違があるのといふことは斷じて申しません」と言ふことを言ひ切つた。そこで是は一筋ではいかぬといふので、とう／＼日經上人を江戸へ送つた、當時江戸新城と言つたが其處へ連れて參つた家康も態々駿府から來るし、大勢の大名も參つて居る、芝の旅館に日經上人が泊つて居られる、翌日愈々問答といふ形にし、法華宗が敗れたといふことにしてやらなければ、譯もなくやる譯にはいかぬから形式

を問答に托して、翌日は殿中に於て問答があるといふことに相成つた、其前夜上人の旅館へ六十人ばかりの  
 奥力同心の者が踏込んで或は十手を以て或は木剣を以て日經上人の體を縦横無盡に打撃つた、上人は體が腫  
 れて熱が出てウン／＼と言つて唸つて居るので、半死半生でありますから逆も頭を擡げることが出来ない、  
 呼吸が穢に通ふといふだけで、物が言へない、どうか斯うか息が有るだけで殆ど人事不省の有様になるまで  
 に打撲つてしまつた、さうして置いて翌日問答の時間が來ると表の方から何故來ない／＼と言つて催促して  
 遂に戸板に載せて江戸新橋に昇ぎ込んで、問答を吹掛けたのであります。物が言へぬやうになつて居るのに  
 問答を吹掛ける、其時に日秀上人が御供をして參つて居りまして、「どうぞ日經は斯様に發熱して居ること  
 あります故に、私が代つて問答をすることを御許を願ひたい」と言つて申出たのである。其時に高野の頼  
 慶といふのが判者になつて居つて非常に性の悪いことを言つて居る、それは頼慶が問答の後二日になつて詳  
 しく書た漢文の法論記があります、實に慘酷なことを言つて居る、「日經が問答をするのに何も日秀などが出  
 る所ぢやない、常日頃種々なことを申ししたが、それは民間で言うたのであるから當にならぬ、今日只今此處  
 に於て言ふのが眞劍勝負だ、言ひたいことは何でも言へ、一言も言ふことの出来ないのは嘘ばかり言うて居  
 つたのだらう」といふやうなことを言つて、まるで地獄の鬼婆が虐めるやうな慘酷なことを申し居ります  
 それで日經上人は遂に其場に於て袈裟を取られ、種々な迫害を受けて擧め取られ、非常な重罪犯人のやうな  
 取扱によつて東海道を送り届けられて、京都の六條河原で耳殺ぎ鼻殺ぎの刑を受けたのであります、併  
 ながら其處まで行つても決して讒罪證文を書くといふやうなことを致しません爲に、遂に徳川も手を下すこ  
 とが出来ずして宗旨滅亡といふことがやれなかつたのであります。若しも總ての本山貫首たる者が念佛無間  
 は經釋に御座なく日蓮の我流にて候といふやうなことに判が調うたならば、狸爺が引くり返つて「其様

な經にも無ければ釋にも無い據り所の無い法を説くといふことは相成らぬ、法華宗は差止めぢや」と云ふこ  
 とを言はうと考へて居つたのである、一人も異存なく我流であると言つたならばお前等皆此通り  
 言ふぢやないか、仕方あるまいといふことを言つて、到頭日蓮宗を破却滅亡仰せ付けると云ふ考をして居  
 たのを、日經上人が飽くまでも命にかけて之を貫いた爲に、遂に其政策を實行することが出来なくして、日  
 蓮聖人の教が今日に傳はり得たのであります。此點は日蓮宗に於ける所の一大厄難を日經上人が拂ひ退けら  
 れたので、實に第一の功勳と申さなければならぬのであります。それは其意味から敷衍して種々のことを考  
 へますと、其事一つにはあるが、それが非常なる功勳となつて現れて來ると思ふのである、第一には坊さん  
 の精神を刺戟することは多大なるものでありませう、日經上人の事蹟に感激せぬやうな坊さんは今日でも生  
 くら坊主である、少し強い壓迫が來れば腰を抜からしてしまふ、それが官憲の壓迫でなくとも檀家の壓迫が  
 來ると譯の分らぬことに屈服してしまふ、又少し上の録司とか何とかいふやうな坊さんが反對するとグニヤ  
 ／＼とする、そんなことでは正しき日蓮主義の教は宣傳出來ない、それが日經上人のやうな非常な激しい壓  
 迫に對抗しても最後の最後まで其の意思を貫いて法を護られたといふことは非常なる大功勳であります。身  
 延の日遠が日經と相並んで殆んど最後まで來たけれども、遂に一番終りに「斯んな狼のやうなものや争う  
 ても致方がない、狼と喧嘩して命を取らるゝのは馬鹿者だ、狼の前には念佛を言はうが何を言はうが構はぬ  
 國主の仰せならば念佛を申すも差支ない」と云ふことを言つて、色々申して居りますけれども、局外の學  
 者の批判から言へば當時の日本人の氣質として其處まで争うて來たものが一變して狼と喧嘩するやうなもの  
 だから、狼の前ならば親の悪口を言つても何を言つても構はぬといふことで變節したといふことは、是は全  
 く心の腐り果てたもので、是は駄目な人間だと論結しなければならぬものだと言つて居る、唯一人日經上人

が最後の最後まで鼻を殺がれても耳を殺がれても構はず、此法華經には一點の傷を付け申すまじく候と言つて其意思を堅く貫いた所に光がある、大體あの時分の氣性から言つても「謝まり證文だと言つたら中の文句が何とあらうとも日蓮聖人が命までかけて、立てられた此教を奉ずる者が書べきものでない、況んや其教に誤があるの何のといふ謝り證文に筆を執るといふやうなことは、硯を投げ付けても筆を執るべきものでない」といふのが學者の評論する所である、其の生つ粹な所を行つたのが日經上人である、それが後の教を傳へる者の精神に如何なる影響を與へるか、不肖なる我々も幾分ても茲に正義に目覺めた所があるとすれば近くは此日經上人の感化といふものである。それ故に日經上人が當時の宗門破却の厄を免れしめたのみでなく、後來の傳道者の精神に正義の觀念を植ゑ付けたることは眞に偉大なる功績と謂はなければならぬと思ふのであります。

又廣宣流布の大願を力説して自らも晝夜傳道に従事して此法華經を擴張し、廣宣流布せしむる所の働をなされたことが是が又如何にも模範的なことであつて、殊に日經上人は言論の上に於て非常な立派な人でありませす。法華經の傳道者は言論がやれなければいけない、學問ばかりして居つた所が人の前に立つて赤い顔をしたたり、物を言ひかければ行詰つて忘れるといふやうな者は駄目である、何處までも法華經を宣傳する者は言論の雄として大に宣傳に盡さなければならぬ、所が日經上人は非常な辯論家である、日經上人の雄辯であるといふことは反對の側に居つた一致派の本國寺日蓮が書いて居る繫珠録と云ふ書物の中に日經上人の雄辯といふことを書いて居る、有馬の温泉に行つて禪宗坊主と問答した話を書いてある、實に痛快な事である、禪宗坊主が「温泉に来て非常に心持が宜い、お互どうも温泉に這入つて洵に宜い氣分ぢや」と言うて居る、所が日經上人が直ぐ反撃を試みた、「温泉に這入つて居る人間などは大體下らない者が湯に漬つて居るの

で、片輪の集合所である」と言つて禪宗坊主に引つかゝつた、所が禪宗坊主も却々面白い奴で、「さういふことを仰しやるけれども、今夜は満月であつて此温泉にお月様が映つて居る、此お月様が湯に這入つて居るところを思ふと、片輪ばかりが温泉が好きなぢやあるまい」、所が日經上人が「それはお前が分らぬ、是は満月といふけれども片輪と片輪とが寄つて斯ういふ風になつたのぢや」と言つた、それは一つの龍辯である、正しい言論ではない、唯風呂の中の冗談話ではあつたけれども、一方が宜い心持だと言ふから、片輪が浴して居るとやつた、片輪ばかりぢやない満月が浴して居ると言ふと、ナニそれは片輪と片輪の寄合だと言つた所に言論に於て非常に弱氣のあるといふことを日蓮上人が感嘆して書いて居ります。是は唯だ一例であります。彼が如く熱心にして彼が如く透明なる頭腦と抱負を以て、さうして日蓮聖人の教を弘め、法華經に依つて大信仰を立て、法華經を護持して、さうして鼻を殺がれ耳を殺がれてからも尙且一生懸命の爲に説法をしたといふ人は餘り無いのであります。斯ういふ人の言論なればこそ之を聴く者が何人も感激し感動したものと思ふのであります。日經上人の一席の説教によつて五千人七千人改宗したといふことであるが恐らくさうでありませう、今日よりは質朴であり佛敎の信仰に富んで居つたから、日經上人が誠心籠めての一席の説教で五千人七千人改宗したこともあつたであらうと思ふ、殊に日經上人に就て忘るべからざるは其鼻を斬られ耳を斬られた時の感想であります。俄に變る自分の姿を鏡に映して驚いたといふことが書いてあります。「法難は覺悟の前である、鼻を斬られ耳を殺がれて痛かつたけれども、此頃は次第に鼻も癒え耳も治つて來た、扱今後を如何にすべきか」、鏡に顔を合して見ると今までとすつかり容子が變つて居る、人間鼻が無くなつて耳が無くなつてしまつたら今までの自分の顔とは變つたものであらうと思ふ、「斯ういふ顔をして人々の前に立つて教を説くといふことは如何にも恥かしいことである、山の奥に閉ぢ籠つて廣宣流布を願つて一生を終る

べきか、人々の前に立つて此法華經を説くべきか」といふ此心の動きを文章の中に書いてある、「もう大勢の人の中に顔を出すことは恥しいから止めようかと考へたけれども、待て暫し法華經の法師品を見れば、忍辱の鐘を衣て此の經を説くべしとあるが、忍辱の鐘といふのは此場合に衣るべきことであらう、鼻が無いか見つともない、耳が無いかあかしいと、言つて嘲り笑ふ者があるならば、其笑を忍び其嘲を耐へて人の爲に法を説くのが、忍辱の鐘を衣るのであると思つて喜び勇んで出た」といふことが書いてある、命懸でもつて此結構な教を傳へられたといふことであります。故に日經上人の御苦心を思ひ、其苦心を己に移して僧俗は何れも道念を堅固に持ち直し、在家の人は外護の本分と言つて外から教の爲に盡して良き法と良き人と良き檀那と此の三つが寄合つて此三つを以て廣宣流布の大願を成就すべきなりと仰せられた、日蓮上人の此廣宣流布の大願に貢献しなければならぬのであります。常樂寺は此意味に於て慶印寺の跡地は布教傳道の上に非常な貢献をして参ります、又此大きな迦藍殿堂が布教傳道の道場として今後は定めし活躍することでありませう、願くは檀信徒の人々も斯様な立派なお寺で開山は日經上人、殿堂は改築せられ、寺院は積々と布教傳道が出来来るやうな理想的なる寺院に段々なることをお喜びになつて——理想的なる寺であれば功德が多い譯である、同じ本堂でも蜘蛛の巣が張つて居る本堂と、時々大講演會を開いて正法宣傳の功德善根を積む寺とは違ふ譯である、此の大きなお寺の檀家と相成つたことをお喜びになつて、どうぞ信心を磨いて戴きたいものであります、日經上人に關する整うたるお話が出来なかつたことを第一日經上人に御託を申し上げ、且つ今日の會合に對して不行届の點の御許を願ふ次第であります。是れから大法會が始まる譯でありますから私の講演は茲に終を告げることに致します。

本多日生 狛下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初步 金七拾錢
- 日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 國民道徳と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 金貳圓貳拾錢
- 日蓮聖人の感懐 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義の運用 金壹圓八拾錢
- 東洋文明の權威 金壹圓八拾錢
- 國民教化 金貳圓貳拾錢
- 法華經の伴 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 卷一、二、三、四、五、壹部金壹圓七拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓
- 聖語錄解 金貳圓貳拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 以上各送料一部金八錢
- 大藏經要義 送料一部金貳圓四拾錢
- 法華經要文 送料一部金貳圓

思想の惡化善化  
人類文明の基礎  
正しき理解と信念

以上購讀希望の方は左記へ申込さるべし

東京市外品川町妙國寺内

大藏經要義刊行會

振替東京三一五九六番

各一部金六錢百部以上金五錢の割  
送料一部金貳錢

價定一統		廣		告		料	
一冊	金參拾錢	送料一錢	一冊	金參拾錢	送料一錢	一冊	金參拾錢
一ケ年	金參圓參拾錢	送料共	一ケ年	金參圓參拾錢	送料共	一ケ年	金參圓參拾錢
四分ノ一頁	金參圓	送料共	四分ノ一頁	金參圓	送料共	四分ノ一頁	金參圓
事の金前							

不許複製

大正九年十二月十四日印刷納本  
大正九年十二月十五日發行

(第三百十號)

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

印刷所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地



明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可

目 次

精神教化と吾人の活動(時言)	本多生
思想戦の意義(法幢)	本多生
聖徳太子の憲法に就て	本多生
本經祖書要文講義	本多生
日蓮聖人教義綱要	井村成
宗門史料	山根村
赤化の西伯利より歸りて	野口青
改造運動と信仰	武田顯
佛陀と神明と	松尾鼓
記事報道十數件	松尾鼓

第廿五年二月號